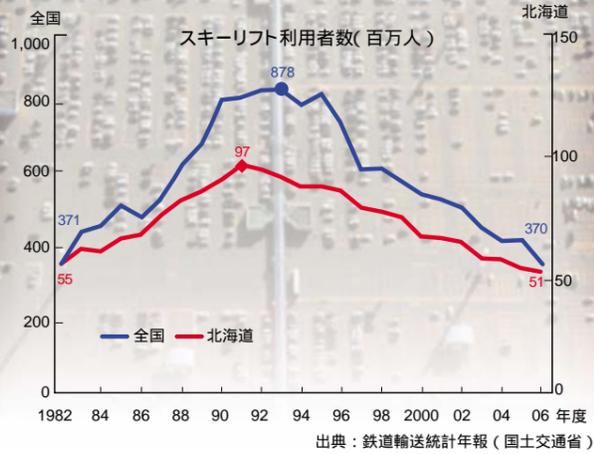


グローバル化への再挑戦

インターナショナル・デスティネーションを目指して～ニセコの挑戦～



北海道は、欧米先進技術の導入など我が国の近代化を先導してきた歴史を有していますが、その潜在発展力を必ずしも十分に発揮できず、バブル後は経済的低迷を余儀なくされてきました。しかし最近では、東アジアからの観光客の増加や農水産物の輸出拡大など、さまざまな分野で国際化の新しい動きが顕著となってきています。

このシリーズでは、グローバル化を北海道がそのおろからで開放的なフロンティア精神を発揮して地域の活力に転換していくチャンスととらえ、その現状と課題、今後の展望を探ります。

苦悩するスキー王国

毎年、冬になると多くのスキーヤーが北海道を訪れる。道内100余りのスキー場が呼び込む道外スキーヤーは年間40万人にも達する。

スキー環境に恵まれた北海道は、当然のことながらスキーヤーの数も多く、数多くのオリンピック選手を輩出し、国体でも圧倒的な力を誇っていた。道内スキーヤーの増加は、北海道のスキー産業、スキー場、スキー学校、ホテル・旅館、スキー用具製造などの発展を促し、中でもスキー場を中心とするホテル・ペンション、スキー学校などは、「道内客中心、夏期集中、札幌集中」という北海道の観光構造を是正するものと期待され、冬場の雇用機会の確保が課題である北海道にとって理想的なビジネスとなった。

しかし、近年、まず圧倒的なシェアを誇ったスキー用具製造が後発の長野などに続く海外との競争でほとんど壊滅状態になっているし、スキー客も、直近の2006年シーズンは、映画「私をスキーに連れてって」が大ヒットした1990年代前半の約3分の1にまで減少している。この傾向は全国的なもので、1800万人といわれたスキー人口も、今では600万人と3分の1に激減している。このため、140を超えていた道内スキー場も30以上が閉鎖に追い込まれている。

そんな中で、唯一バブル期のような賑わいを見せているスキー場が倶知安町のヒラフスキー場である。

老舗スキー場の盛衰

「ニセコ」連峰の主峰ニセコ山(海抜1308m)は、山麓に5つのスキー場を有する北海道のスキーのメッカであり、かつては全国のスキーヤーあこがれの地でもあった。中でもヒラフスキー場は、古くからの湯治場が登山基地になり、さら

でいともたやすく実現してしまいそうになって、逆に戸惑っているのかも知れない。いずれにしても、多くの不安材料はあるものの、地元にとっては千載一遇の好機であることは間違いないのだ。角を矯めて牛を殺す愚挙は、ぜひとも避けなければならない。

ニセコ・ワークショップ

2006年6月、私も北海道地域総合振興機構(はまなす財団)は、北海道大学観光学高等研究センターと共催で、倶知安町、ニセコ町、北海道後志支庁、国土交通省北海道開発局小樽開発建設部とともに、まず関係者間で現状をしっかりと把握したうえで、ニセコの将来像について検討しようとした。ニセコ・ワークショップを立ち上げた。半年間前後6回にわたり、ニセコおよびその周辺で活動しているリゾート会社、リフト会社、ホテル・ペンション経営者、アウトドア関係業者、農業者、オーストラリア開発業者、アメリカ別荘販売会社など多くの関係者からヒアリングを行い、検討した。

乱開発と指摘されているオーストラリアの開発業者からは、自分たちも投資した物件が減価することは困るので乱開発には反対であること、何が乱開発であるかを判断するためには、一刻も早くリゾートばかりではなく市街地を含めた地域のマスタープランを作ることが必要なこと、そのためには資金協力を含めて開発側が協力するのは国際的な常識となっていることが強調された。

また、台湾・韓国などの東アジア諸国、さらにはアメリカ・カナダからも観光客が来訪し、これらを目当てに数多くの外国人が居住を始めている実態についての証言も聞かれた。

に山岳スキーの拠点に成長し、1960年代にはリフトがかかれ、スキー場になったという北海道には珍しい本州型のスキー場である。

自然発生的にコースが設定され、リフトがかけられたため、長くて厳しい山岳コースが連続することになり、熟練者や若者の挑戦心を刺激する人気の高いスキー場になった一方で、初心者やファミリー層には敬遠されがちであった。また、ゲレンデに向かう道路の斜度が急なため、車がスリッパを抱えたスキー場でもある。さらに、我が国にハブルが発生するたびにヒラフの知名度は地価高騰を招き、土地所有の分散化・小規模化が進んだ。そのため、スキー場の構造を抜本的に変革しようとする開発が妨げられ、リフト券の共通化も遅れたため、1980年代には一元的・計画的に造成されたルスツや富良野などの後発スキー場の後じんを押すようになっていた。

オーストラリア人がやってきた

競争力の低下は経営収支の悪化を招き、経営の悪化は資本設備の更新意欲を減衰して施設の老朽化に拍車をかけ、スキー場をより魅力のないものにする、という悪循環を生んだ。そんな中、ニセコにオーストラリア人スキーヤーが現れたのだ。なぜ急にニセコに来るようになったのかは諸説があるが、インターネットが大きな役割を果たしたことは間違いない。ニセコのホテルでアルバイトをしていた外国人が、暇を見つけて英文のホームページを立ち上げ、これをたまたま見たオーストラリア人が「ニセコ」に来訪し滑ってみると、とても良かったという感想が口コミで広がったらしい。いずれにしても、この「ニセコ」の例は、海外観光客とつながりにインターネットが重要であるかの証左となっている。

ニセコ地域を名実ともに国際リゾートへ

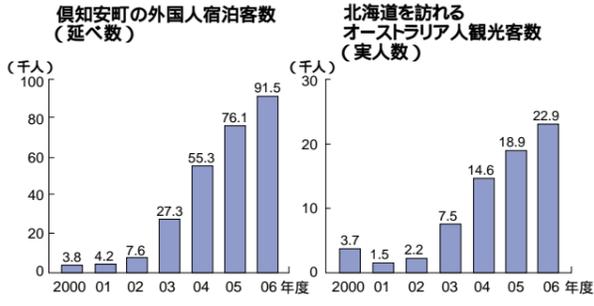
半年にわたる議論を踏まえ、当財団と北海道大学はマスタープランのたたき台となるべき考え方を取りまとめた。内容的には、ニセコ地域を名実ともに国際リゾート(インターナショナル・デスティネーション)に育て上げ、観光客を増やす、という方式を採った。例えば、観光客にとっての比較から2万ベッドという目標を掲げ、これを仮にニセコ地域をニセコセントラル地区(ヒラフ・倶知安市街)、エスニックニセコ地区(東山・アンヌプリ・ニセコ市街)、ディープニセコ地区(モイワ・昆布、チセヌプリ)、ニセコハイリゾート地区(花園・ワイズ)の4地区に区分したとし、各地区が不足する1万ベッドをどのように分担するのか、その際それぞれの地区がどのような性格付けをしてニセコ全体の魅力を高めるべきであるかについて、早急に関係者間で議論してマスタープランを示すべきことを提言した。また、空港からのアクセス、小樽・札幌の有する特色のある都市機能をどのように利用すべきかなどについても検討を促した。例えば、昨シーズンに、札幌市内で開催された札幌交響楽団の定期演奏会を聴きに行くオプショナルツアーを企画したところ、たちまち満員になった。オーストラリア人が関心を持っているのは、地域の実生活文化であり、お座なりなフジヤマ、ゲイシャではないのだ。

いずれにしても、この好機は地元だけのものではなく、北海道全体に波及する可能性のあるものであることは間違いないのだ。

(財)北海道地域総合振興機構常務理事 山崎 一彦



ヒラフスキー場夜景



出典：北海道観光入込客数調査(北海道)



ヒラフ地区のコンドミニアム・後ろは羊蹄山

現在のヒラフは、欧米のスキー場にいるかのような錯覚を与えるほど、ゲレンデやレストランに外国人スキーヤーがあふれている。人口約2000万人のオーストラリアにはスキーヤーが30万人おり、そのうち5万人程度が海外まで雪を求めて遠征するといわれている。これまでは主としてカナダのワイスキーヤーやバフなどであったが、その日のうちには到着できない、時差がある、寒いなどの理由から、ニセコを目的地にする人々が多くなっている。また、同じ文化圏に属するカナダ・アメリカではなく、日本に旅行するという興味も大きいという話も聞く。今では、オーストラリアから海外に遠征するスキーヤーの8割が、ニセコで滑ったことがあるといわれるまでになっている。

長期滞在型でインターナショナル

今ヒラフ地区では、オーストラリア資本のコンドミニアム(リゾートマンション)が次から次へと建設され活況を呈している一方、地価が急騰するなど乱開発との批判も起きている。コンドミニアムの建設は、彼らの滞在日数が平均10日前後と長期に及ぶため、窮屈なホテルやペンションに寝泊りし、毎日同じような食事を取り続けることはできないといいつ、極めて生理的な理由によるものである。そのため、自分たちで食事が作れるキッチンと、ストレスが溜まらない程度の広さの居住スペースが必要といいつことで建設が進んでいるのだが、そのスピードがあまりにも速いので、地元住民を不安にさせているようだ。

しかしよく考えてみれば、これは、長年日本人が夢見てきた「長期滞在型の国際リゾート」の実現に向かっているといいつことではないだろうか。現に、倶知安町自体も「東洋のサンモリッツ」をつたい、長期滞在型の国際リゾートを目指してきたはずだ。長年の夢がこのような形